原告団

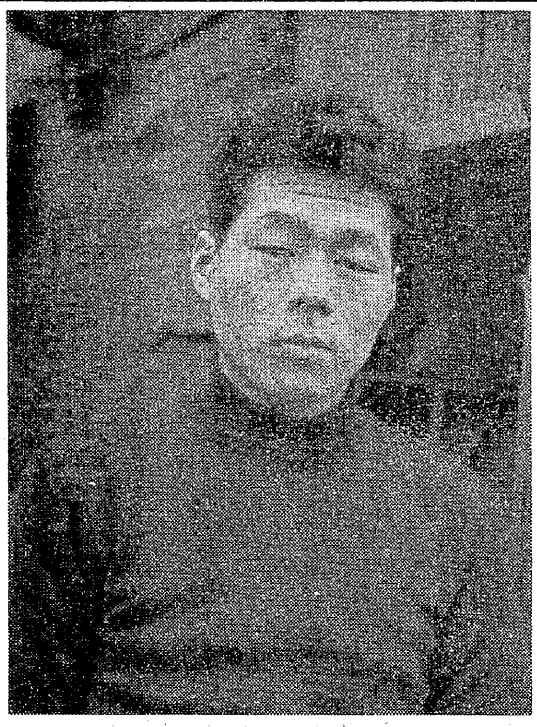
遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百十九号

原告団レポート

遺族――

松沢さん夫婦



写真上は、生前の隆さんの面影。下は、今も悔痕に胸をしめつけられながら、ひっそりと生きる松沢さん夫婦。大爆発さえなかったら……。

遺族を罪人扱いとは

かろうじて育てた息子の命奪いながら

一瞬に消えた希望の光

傷心の生活

ことは、大牟田市小浜町八二の六四。戦災住宅を改造したお粗末な住まいで、例に洩れず傷心の思いを胸に秘めながら生きる、遺族夫婦がある。

遺族夫婦とは、松沢清人さんと妻のオワリさんのこと。松沢さんが明治四十年九月二日生まれで七十一歳。妻のオワリさんが、同じ明治の四十四年二月二十二日生まれの六十七歳。思えば、息子の隆さんをあの三川鉱の炭じん大爆発でなくしてから十五年近くなる。

夫婦には男四人に女二人、つまり六人の子供があった。隆さんは三人めの子供で次男にあたる。ほかは今それぞれ世のなかで身を立てているが、隆さんだけが早やばやと世を去ったわけである。

松沢さん夫婦にとって、とりわけ隆さんはかけがえのない存在だった。というのは、ほかの子どもが思い思いの土地で、父親の職業とまったく違った仕事についたり、あるいは遠くの地に縁づいたりしているのと違い、隆さんが父親松沢さんの跡を継ぎながら三池炭鉱で働いていたからである。

親の跡継ぎ

もともと松沢さん一家は、太平洋戦争敗戦後の台湾から引き揚げてきた家族。当時はまだ彼の老父もいっしょだったし、大家族をかかえて、文字通り今日をどう生きるか、というせっぱつまった事情から、松沢さんは三池炭鉱に飛びこんだのだった。

台湾で警察官として暮らしてきた松沢さん。ツルハシをふるう腕はなく、初め大浦鉱の坑外の仕事に。それでは食えないことがわかり、やがて坑内へ。宮浦鉱坑内倉庫の道具当番が仕事だった。

昭和二十七年春、成長を遂げてきた隆さんは高校へ進学。県立大牟田北高校と、三井が当時経営していた鉱山学校と、共に入学試験に合格。「よし、家も苦しいことだし、卒業すれば、仕事はすぐ父ちゃんが働いている炭鉱にきまるのだから……」、と隆さんは鉱山学校へ。そして本人がのぞんだ通り、卒業するとそのまま三川鉱の払採炭の仕事へ横すべりしたのだった。

「精いっぱいの親孝行から、鉱山学校へ進学していったのでしたが、普通高校の入試にも合格していたことでしたから、あのときなぜ鉱山学校進学をとめなかったのか、今になってからくやまれてなりません」

父親松沢さんは述懐するが、心のなかに刻まれた傷痕の深さをしのばせる。

馬小屋住い

松沢さん夫婦の不幸は、日本の太平洋戦争敗戦と共に始まった。台湾で、警察官として暮らしをたてていた松沢さんの一家の生活は崩壊する。

松沢さんは二十一年に、八人の大家族をひきつれて帰国。故郷の鹿児島にはすでにこれという身寄りがなかったから、余儀なく妻オワリさんのきょうだいを頼って荒尾へ。かろうじて某農家の馬小屋を借り受けることができた。

土間のうえにわらを敷き、そのうえに、やっと手に入れた畳を敷いただけの住まい。それも畳の表の方があまりにもひどく損傷していたところから、やむなくわら床がまる見えの裏の方を表にしたあばら屋だった。

夜、一家が寝ると、ノミとダニが「さあー」といわんばかり行列してやってきては、体じゅうをはいまわった。老いた父に松沢さん夫婦の三人の大人にすれば、それでも歯を食いしばって耐えることができたが、まだ学校へゆく者や、あるいはその前という六人の子どもたちはさすがに眠ることができず、毎晩ひィひイ泣き通すのが常だった。

親思いの子

さいわいなことに、しばらくして一家は現在の戦災住宅に住みつくことができ、子どもたちも成長を遂げていった。

三川鉱の払採炭工として働くようになった隆さんは、とりわけ見違えるような若者になっていった。人一倍気かん坊だった半面、すぐれて親思い、きょうだい思いの人柄だった。給料日にはきまって、「三井さんのあんまり金ばくれらすけん、給料袋が重たくて重たくて。ホラ、買ってきたよ」といいながら、父親へ焼酎をさげて帰ってきた。

隆さんが結婚したのは、三池闘争が終った三十五年十二月。長く心を許し合ってきた人と結ばれる。某病院に看護婦として働いていた洋子さんで、隆さんが二十七歳、洋子さんが二十二歳だった。

結婚すると、新郎新婦は家のすぐ近くの小浜南社宅の一隅で新婚の夢を結んだ。

そのとき、松沢さんはすでに炭鉱を退職、戦災住宅の住いを改造しては、台湾時代の食生活を思い返しながらラーメン屋を開いた、という。

一家心中を

それでも、雨露をしのぐことのできる住まいだったが、かんじんの明日からどう食ってゆくか、はたとこまった。あとさきの考えもなく松沢さんが飛びこんだところこそ、ほかでもなくその頃出炭していた大浦鉱だったのである。

坑外の仕事だったとはいえ、受ける賃金はいくらにもならなかった。松沢さんは、だからたとえ人びとは休みを家族といっしょに楽しんでいるときも、働きに出かけた。お昼のベントウをもっていったことは一度もなかった。そうしなければ、子どもたちに食べさせることができなかった。

ひとまず、あたりまえな暮らしができていた昨日にかわる今日の暮らし。

「馬小屋にズラリ、六人が頭を並べて寝ている子どもたちの顔を見ていますと、ついむらむらーっと、『ええ糞っ。いっそこのままこの子どもたちをしめ殺して、死んでしまおうか』と、何度思ったか知れません」

松沢さんはその頃のことを述懐しては、涙をこらえる。

消えた希望

結婚の翌――三十六年二月十日隆さんは子宝を得た。男の子で、宏祐という名まえをつけていつくしんだ。

宏祐君は、今高校の三年生。何ごともなかったならば、戦後荒尾の一農家の馬小屋生活から始まった松沢さん一家の暮らしにも、今頃はほのかな希望の光が射していたはずであった。

ところが――、それがわが国の石炭政策のもつ性格からさらけ出されたものだったとはいえ、三井独占資本のあまりな合理化強行はついに三川鉱炭じん大爆発をひき起こしてしまい、隆さんの命を奪い去っていったのである。

松沢さん一家、とりわけ新妻洋子さんと幼な子宏祐君の手から、一瞬にして消えうせていった希望の光。

幼な子を抱いた洋子さん。悲嵐に洗われるその二人を見つめながら生きる、松沢さん夫婦。夢は、木っ葉みじんに打ち砕かれてしまったのである。

子供達の手

悲しみのなかから、やがて立ちあがった洋子さんは、幼な子を抱えながら再び病院の看護婦として働き始める。

でも、隆さんの死が与えた打撃は大きく、がっくりとなった松沢さんは健康をうしなった。ついに胸部疾患のため、入院生活へ。まだまだ学校に通う子どももいたときのこと、妻のオワリさんは追いたてられながら失対労働へ。

松沢さんは、四年間にもわたる入院生活をおくった後退院。今は自宅で静養生活。でも妻のオワリさんは、今も毎日失対の仕事で働いている。

さいわい、三川鉱大爆発で世を去っていった隆さんのほか、嫁ぐべき人は嫁ぎ、嫁をとるべき人は嫁をとり、それぞれに身を立てている。

ほとんど関東や関西での暮らしで、大牟田の一隅に住む両親に常に暖い手を差し伸べてくれる。

昨年のこと、七十歳になった松沢さんのために、〝古稀の御祝〟だとして、子どもたちが共同で旅行にさそってくれた。東京―日光―鎌倉―京都―奈良と、病身の松沢さんは、妻のオワリさんにささえられての、またとない旅だった。

冷たい会社

結婚してわずか三年添っただけで、夫隆さんをもぎとられてしまった洋子さん。

今は、隆さんの実弟の憲太郎さんと再婚。隆さんの遺児の宏祐さんともども心から結ばれ、神奈川県の某市で新しい家庭をつくっている。松沢さん夫婦の、祈りにもにた願いが実ったのである。

年忌年忌には、洋子さんは必ず帰ってきて仏の冥福を祈ってくれるというが、「おかげで、息子の位碑のことも心配せずにすみます」とはオワリさんの述懐。

それにしても、この一家に会社は冷たかった。その例一つ――

夫婦は、かって近くの小浜南社宅のおフロを利用していた。戦災住宅にその施設がなかったからだが、それより大爆発遺族としてそれくらいのあまえは許されるものだと思いこんでいたのであった。

ところがある晩のこと社宅の入口の守衛小屋につれこまれ、「外部の者の入浴は禁止されている。やってきてもらっては困る」と、きついお達しだった。「遺族はちゃんと許されていますが……」というのに、「遺族、遺族と大きな顔をするな。なまいきだ」と、まるで罪人扱いだった。

会社の、遺族やCO患者に対する考えが何よりもここによくさらけだされているではないか。もってのほかだ。